

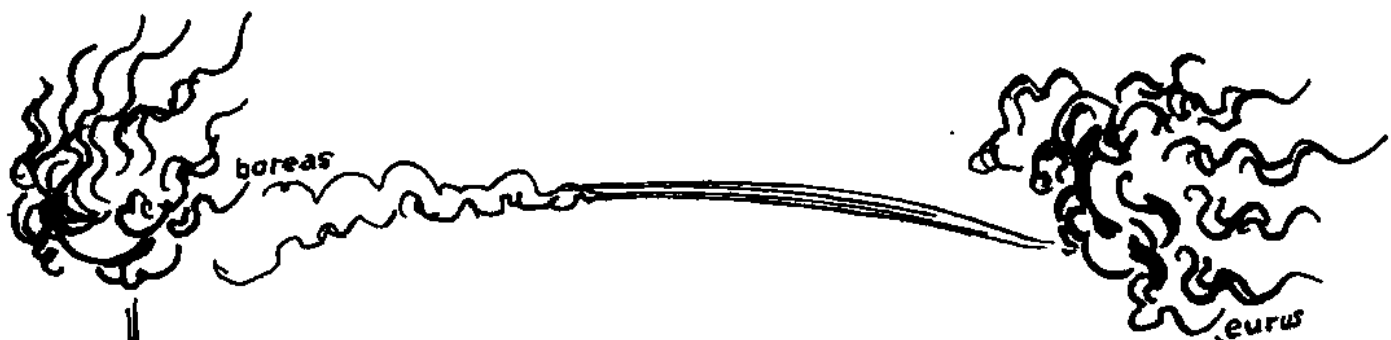
井上史雄著

日本語ウォッチング



岩波新書

540



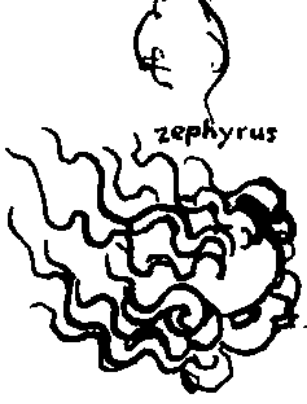
boreas

eurus

井上史雄著
 江苏工业学院图书馆
 日本語ヲオツサシ
 蔵書章

岩波新書

540



zephyrus

notus

井上史雄

1942年山形県に生れる

1971年東京大学大学院言語学博士課程修了

専攻—社会言語学・方言学

現在—東京外国語大学教授

著書—『新しい日本語』『方言学の新天地』(明治書院)

『言葉づかい新風景(敬語と方言)』(秋山書店)ほか

日本語ウォッチング

岩波新書(新赤版)540

1998年1月20日 第1刷発行

著者 いのうえふみ お
井上史雄

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・理想社 カバー・半七印刷 製本・中永製本

© Fumio Inoue 1998

ISBN4-00-430540-3

Printed in Japan

はじめに

この本では、現代日本語の変わりゆくさまを、さまざまな資料を使って、映し出してみる。これまでに集めた日本各地の老若のことばについての資料を活用して、ことばが変わるプロセスを、手にとるような形でとらえたい。具体的にとりあげるのは、ラ抜きことばや、敬語の問題、ガ行鼻濁音、平板アクセント、イントネーションなどの、よく世間で話題になる現象と、東京で実際に使われているのに、あまり気づかれない現象（「ちがかった」「いくない」「あおたん」など）である。また各地で独自に広がっている方言的な言い方にもふれる。一般の人が見逃しそうな現象にも焦点をあてて、書き記すつもりである。

この本では、ことばはいつも変わるものと見る。いわゆることばの乱れの論議が起きたときに、昔からの変化だと指摘することは、研究者のよくすることだが、ここでは普通よりもっと長いタイムスパンで位置づけてみたい。いくつかの現象では千年単位の変化を論じる。新しく出てきた言い方を、乱れ・混乱・墮落などに見なすかどうかは、ことばの社会的評価という別問題である。

論の説得力を増すために、実地調査のグラフや地図を活用する。ことに東京のことばの変化をいうためには、証拠を見せる必要がある。東京のことばは、住んでいる人は分かっていると知っているが、じつは内部差が大きくて、現状の把握がむずかしいからである。

実地調査のグラフや地図では、くどくならないように、必要な情報だけを強調し、他は省いて示す。文章による説明も同じにしたいところである。文法の活用の説明など、面白くないと思う人は飛ばして読んでもかまわない。全体の論理の流れが分かっていただければいい。

もしこの本の見方・考え方に新しさがあるとしたら、全国の方言分布を東京の動きとくらべること、国語史の資料とつきあわせること、そして変化の理由を説明しようとするとかと思う。日本全土のことばの動きを、歴史を通じてダイナミックに描きだす作業への踏み石のつもりである。日本語史という研究分野への足がかりとなれば幸いである。

この本では、単なるワード・ウォッチングを越えたい。ワード・ウォッチングでは、流行語・新語など単語の表層の変遷を追うことが多く、そのときどきの世相・世情は写すが、長い言語史を反映しないことが多い。ここでは、単語以外に文法や発音も見わたし、全国調査をふまえて、国語史の観点から長いタイムスパンをとって考察する。

この本を通じて、身近のことばを観察する楽しさが伝われば幸いである。

日本語ウォッチング◎目次

はじめに

I ラ抜きことばの背景 1

ラ抜きことばはどうか広がったか／使われ方の違い／明晰化という変化理由／ラ抜きことばと動詞の活用／文法の単純化／千年来の大きな流れ／ラ抜きことばへの態度決定

II 「じゃん」の来た道 33

「じゃん」の上京／「だ」「じゃ」「や」の分布と歴史／「じゃん」「やん」と「だ」「じゃ」「や」の関係／「じゃん」「やん」の全国拡大

III 簡略化の動き 51

ちった↑ちやった↑ちまった↑てしまった／ことばの省エネ発音とその影響／新しいラ行五段活用「わかんない」の誕生／動詞「違う」の形容詞化／「みたいに」か

ら「みたく」へ／規則にかなった「いくない」／簡略化の動き

IV 東京ことばの底流……………85

足元からの変化／「うざったい」の広がり方／「かったるい」の採用／「やはり」から「やっぱし」へ／北海道の「あおたん」／強調語の逆流／方言からの採用と卑語・俗語

V 新しい方言の広がり……………117

全国各地の動き／東日本の「いいべ」の合理性／北海道の「しよ」の進出／西日本の「行かんかった」／各地で起きている変化／広がる新しい語形／インパクトのある表現／少ない音韻の簡略化の例／方言の新生「新方言」

VI 敬語の最前線……………145

デスカの簡素化／「……じゃないですか」の機能拡大／デスの進出／(ラ)レル敬語の東進

VII 気になる？ 口調 161

衰退するガ行鼻濁音／専門家アクセント／平板化の広がり
りと歴史／平板化の起こった理由／新しいイントネーション
の出現／半疑問イントネーション／アクセントとイントネーションの機能変化

VIII ことばの変化のとらえ方 195

四つの次元／①言語の次元／②空間の次元／③時間の次元
／④社会の次元／言語変化の雨傘モデル

引用文献 205

おわりに 207

I ラ抜きことばの背景

ラ抜きことばはどう広がったか

身のまわりで話されている何げないことばを心にとどめ、その背景を探ってみると、意外に奥行きが深く、面白い。その筆頭は、「ラ抜きことば」である。従来は「見ることができない」「食べることができない」は「見られる」「食べられる」と言われていたが、最近「見れる」「食べれる」という言い方が耳につく。そして「ラ抜き」というあだ名までつくようになった。

ラ抜きことばは、よく話題にもなる。一九九五年秋に国語審議会が中間報告を出したときには、言葉遣い・情報化・国際化などさまざまなテーマが扱われているのに、新聞でいっせいに取り上げたのは、「ラ抜きことばは認めない」という部分だった。日本人の関心のありどころを示すのだろう。この本でも最初にラ抜きことばを取り上げる。従来の論と違って、東京での変化を見るだけでなく、方言にも目配りをし、過去の日本語も見て、ラ抜きことばがなぜ出てきたかという理由を考えたい。

まず、ラ抜きことばが東京でこれまでどんなふう広がってきたかをたどってみよう。ラ抜きことばが記録されたのは、意外に早く、昭和初期である。そのころ国語学者の体験談として、東京山の手の旧制高等学校の学生たちが「来れない」「見れない」と言っていた例が記されている。その旧制高校生の中には子供のときから使っていた人がいただろうから、発生時期はも

っと前と見られる。大正ころだろうか。

ラ抜きことばはその後じわじわ広がった。戦後は、ことばの実態調査がさかんに行われるようになった。具体的な使用率の変遷が分かる。戦後まもなく、一九四九年の調査では、児童・成人とも「来れない」「食べれない」は数%から十数%の使用率に過ぎなかった。一九七〇年

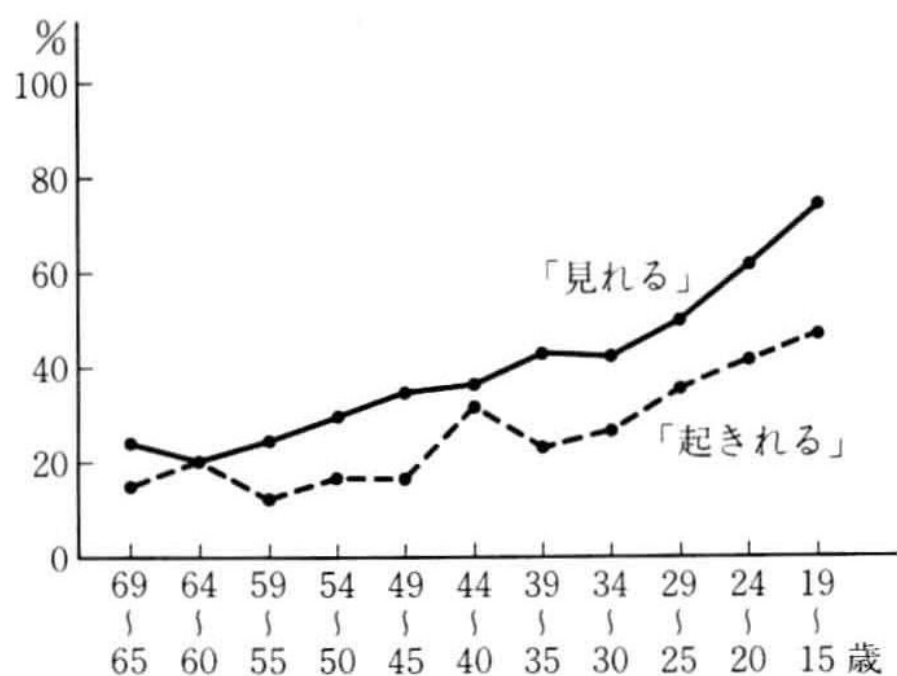


図 I-1 「見れる」「起きれる」の使用率
(年齢別. 国立国語研究所 1981 より)

の追跡調査では小学生(一九五〇年代末生まれ)の半数近くに広がった。ともに山の手で多く使われていた。一九七四年には国立国語研究所による東京での大調査があり、図 I-1 に示すようなはっきりした年齢差が見られた。若い人(図の二四歳以下、一九五〇年代生まれ)のラ抜きことばの使用は、「見れる」で約三分の一、「起きれる」では半数近くに及ぶ。一九八七年の首都圏女子大生(一九六〇年代生まれ)のデータでは、「見れる」「着れる」「出れる」「寝れる」は八〇%台の使用率だそうである。あつというまに広がったわけである。

東京のラ抜きことばが実は地方から入ってきたらしいという見方は、以前からあった。右の東京の調査で

も、地方出身者や、親が地方出身の人にラ抜きが多いという傾向が見つかっていた。以下では、視野を広げて全国のラ抜きことばの分布を見渡し、年代別にたどってみよう。

大正以前のラ抜きことばについては、断片的資料しかない。文法学者松下大三郎まつしただいさぶろう（一八七八—明治一一年生れ）が、出身地静岡県静岡県の方言で「逃ゲレル、受ケレル、といふなり」と、明治時代に書いていることから、東海地方では、すでにラ抜きことばが使われていたと考えられる。また山形県鶴岡市出身の文法学者三矢重松みつやしげまつ（一八七一—明治四年生れ）も故郷の方言で「起きれる」「受けれる」と言う、と記している。東北地方でも明治時代に生じていたらしい。

昭和初期に方言研究がさかんになったときに、愛媛県でラ抜きことばが広がっているさまを調べた論文が出た。また戦後まもなく、長野県・岐阜県の方言で使うという報告が出ている。ラ抜きことばが以前から中部地方や西日本で使われていたことが、これらから分かる。

最近になって、大がかりな調査が行われて、全国の様子が分かるようになった。図1-2に、国立国語研究所の『方言文法全国地図』の準備調査資料（一九七九、一九八二年）による総合地図を掲げる（渋谷一九九三による）。準備調査の一五三地点だけの資料なので、各県二、三地点から全体の様子を推測することになる。回答者の生れた年の平均は一九一〇（明治四三三年ころ）だから、ほぼ明治生れの人のラ抜きことばの分布ということになる。代表的な動詞について、ラ抜きことばの使われそうな項目八枚の地図をまとめて点数化してみると、北海道と中部地方、中

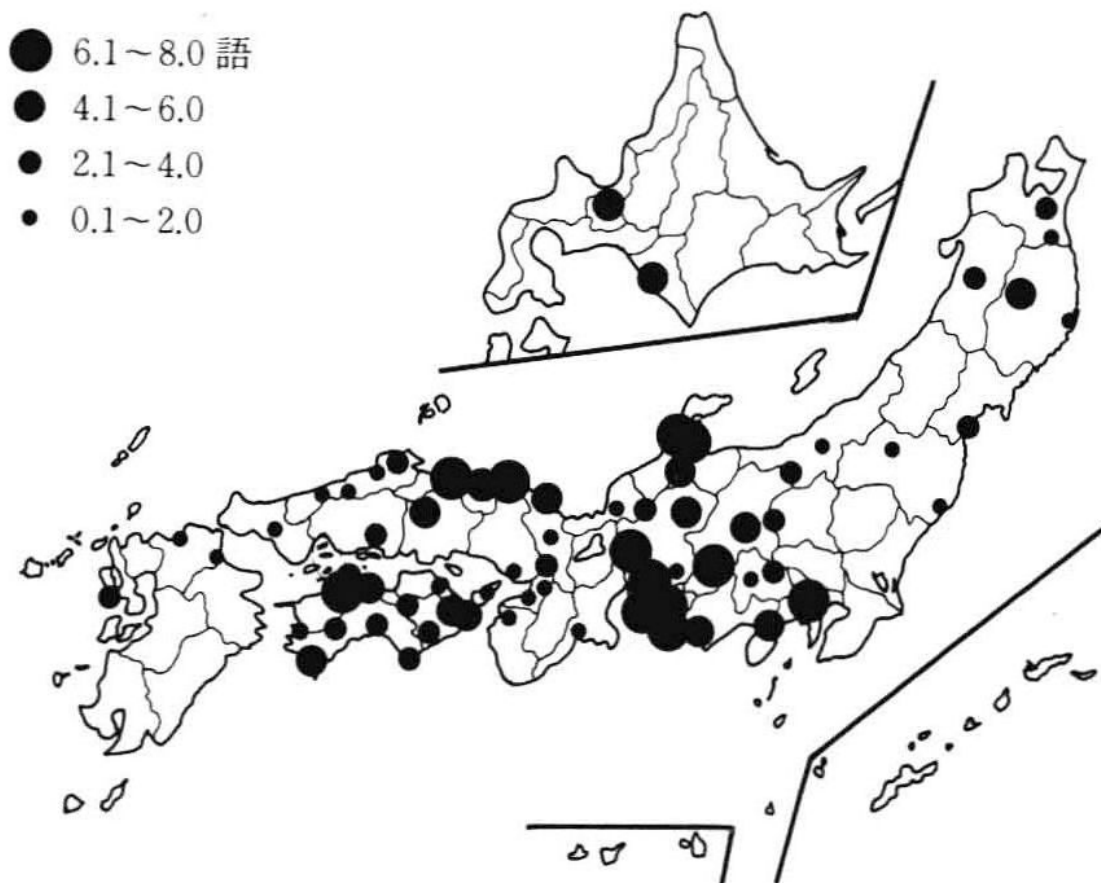


図 I-2 ラ抜きことばの使用度数(動詞 8 種の表現のうち何語でラ抜きを使用するか。1910 年前後生れ。渋谷 1993 より)

国・四国地方などに分かれてラ抜きことばが使われているさまが見える。別の見方をすると、新開地北海道を別にすれば、近畿地方をとりかこむ地域に分布している。つまりかつての日本の文化的中心地の京都・大阪では、以前はラ抜きことばを使っていなかったのだ。

なお、方言での可能の言い方は実は単純ではなく、個人の能力が原因になるときの表現「能力可能」(この子は幼いけど一人で着れる)と周囲の条件に起因する「状況可能」(この服は小さくなったけどまだ着られる)で言い方を区別することが各地にある。ラ抜きことばは、この区別を表わすために一部の方言で発達した可能性があるが、ここでは細かい議論ははぶく。

一九九四年前後に全国各県の県庁所在地と町村部から最低一校ずつ、計一〇二の中学校に依頼し、中学生とその保護者にアンケートに答えていただいた(図I-3、I-4)。全部で七〇〇〇人近く的大量データで、以下でも活用する。保護者の方は、中学生の母親が多く、平均してみると一九五〇年代前後に生れている(余談ながら都会の母親の方がやや年が上である)。

図I-3に、保護者のラ抜きことばの使用率を、県ごとの平均値としてまとめて描いた。この服は小さくなっただけどまだ着られる」という文脈である。図I-2と比べると、生れた年で四〇年ほどしか違わないのに、ラ抜きことばを使う地域は、急に広がった。大部分の県で五〇%以上の使用率になり、ラ抜きことばをまったく使わない県はなくなった。近畿中央部や東京でもラ抜きを使いはじめた。周囲の県から入ってきたと読み取れる。ただし、図I-3と図I-4に示したのは「着れる」だけの使用率で、その中に「着れる」と「着られる」の両方を使うという人が半数近くまじっていることに注意する必要がある。今論議になっているので、知識として両方を知っているのだろう。「着られる」を使わず「着れる」だけをを使う人に限ると、五〇%をこえるのは、東海地方、四国などである。

将来を予測する手がかりとして、図I-4で最近の中学生の様子をみよう。同じ一〇二校のデータの中学生の分を、図I-3と同じ方式で図化した。ほぼ一九八〇年代生れの中学生だが、ラ抜きことばの使用率はさらに高まって、ほぼ全国的になっている。ほぼ全県が五〇%以上の

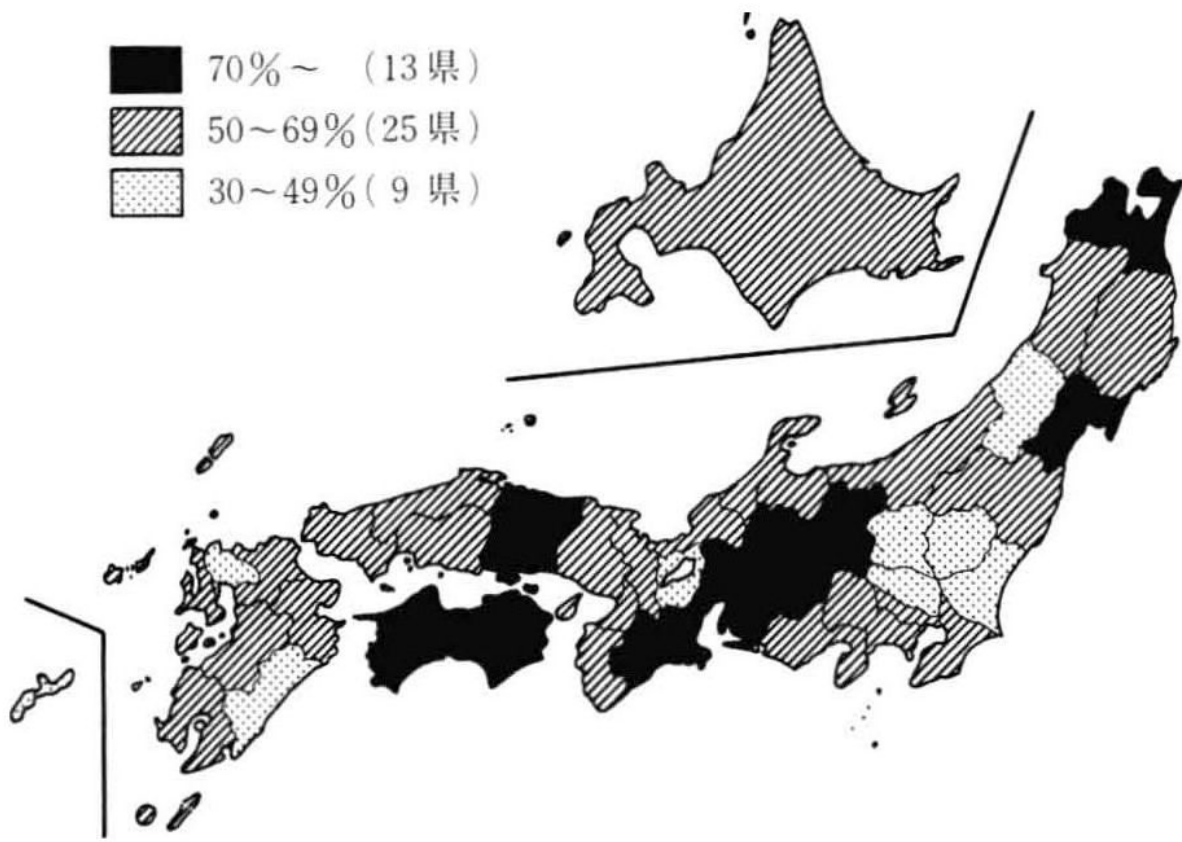


図 I-3 「着れる」の使用率(県平均)① 保護者(1950年代前後生れ)

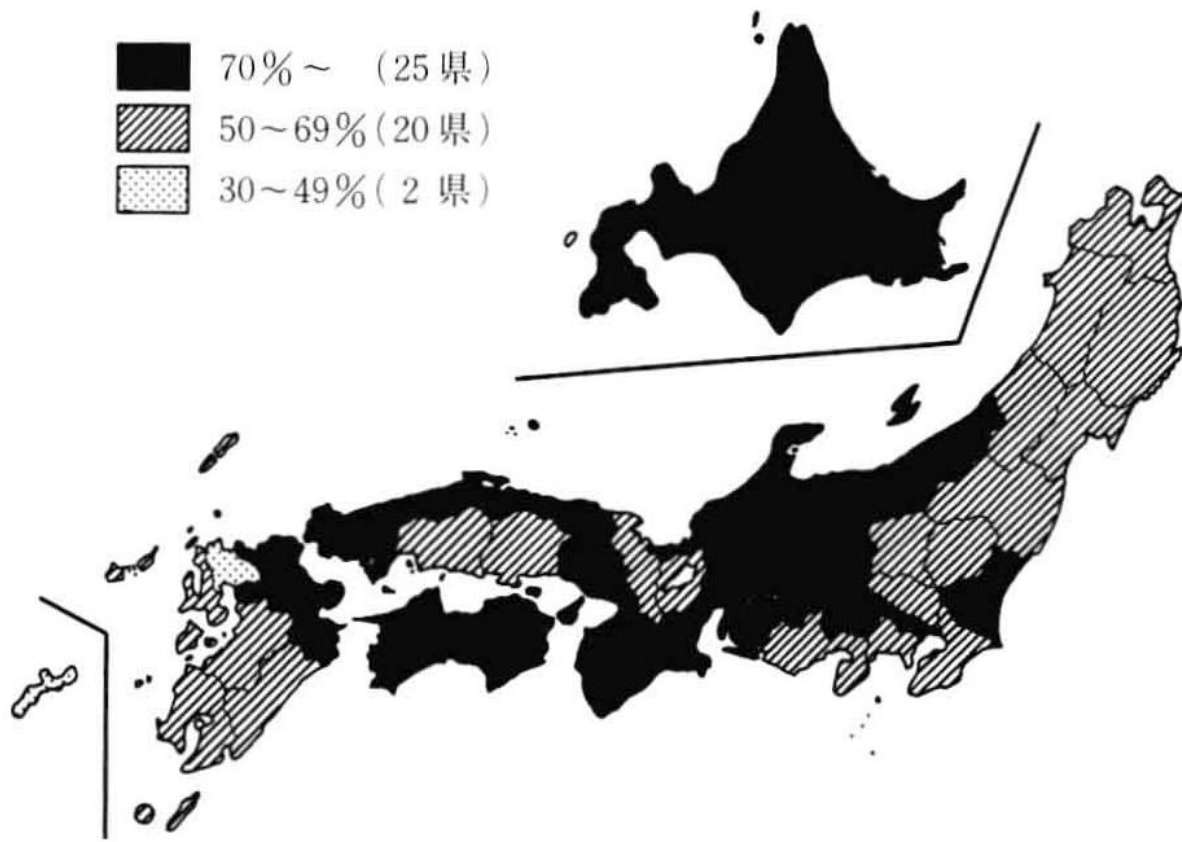


図 I-4 「着れる」の使用率(県平均)② 中学生(1980年代生れ)

使用率になり、大阪や東京でもさかんに使うようになった(ただし「着れる」「着られる」の両方を使うという人が半数近くまじる。「着られる」を使わず「着れる」だけを使う生徒が五〇%をこえるのは、徳島県だけである。ラ抜きことばはいけないということが知識として広がったのだろう)。

以上の地図を比べると、時がたつにつれて、ラ抜きことばの地域がだんだん広がっていることが読みとれる。このほかにも、各種の全国調査でラ抜きことばが取り上げられている。一九八三年には全国の教育学部付属小中学校での調査が行われた。ほぼ一九七〇年前後に生まれた人の調査にあたるが、結果は図I-4の中学生の分布図によく似ている。最近は総理府・文化庁・NHKなどの世論調査でも取り上げている。全国のサンプリング調査なので、大まかな地方別の集計しか出ていないが、いずれの調査でも、首都圏より中部地方の方が、ラ抜きことばの使用率が高い。ラ抜きことばは、やはり、先に中部地方や中国地方などに広がったようだ。東京には中部地方から入りこんできた可能性が大きい。京都や大阪にも近畿地方の周辺部から入りこんだのだろう。

以上の方言分布をまとめると、ラ抜きことばはこれまで一〇〇年近くかけて、少しずつ拡大したと考えられる。まず中部地方そして中国地方に生れ、徐々に周囲に広がったと思われる。東京には、西から、山梨県か神奈川県をへて流入したと考えられる。昭和初期のラ抜きことばの使用報告が山の手の若者であることは示唆的である。山の手に住みつく人は、交通の便から